CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kwansei Gakuin University Repository

新型インフルエンザとキリスト教

北　村　泰　彦

新型の豚インフルエンザは、人への感染がメキシコで４月に報告されてから、またたく間に世界中に広まり、関西学院大学でも１週間の休講を余儀なくされました。今回の新型インフルエンザは毒性が弱く、それほど心配する必要はないようですが、私たちはやはり未知の病気に対しては、大きな不安を抱いてしまいます。その不安を象徴するのが「マスク」ではないでしょうか。北米では感染予防の手段として、ほとんどマスクは使用されないように、その効用に関しては医学的には意見が分かれるようです。目に見えないウイルスに対して、十分な知識を持たない私たちが、マスクで何とか身を守ろうとする気持ちもわからないわけではありませんが、人と接触する機会のない、自動車や電車の運転手がマスクしている様子を見るとちょっと首をかしげたくなりました。そのため、ほとんどの薬局からマスクがなくなってしまい、インターネット上では30倍の値段で取引されるようになったとか。このような「マスク神話」が生まれたのも今回の新型インフルエンザ騒動の特徴の一つではないでしょうか。

新型インフルエンザは私たちにとっては、まさに“Bad News”でしたが、“Good News”を伝えるキリスト教も海を越えて日本にやってきました。こちらの方は1500年もの時間をかけて。キリスト教も初めて出会った人々にとってはまさに未知との遭遇でした。そのために様々な迫害が生じ、それによって命を落とした人々も少なくありません。また真偽が定かでない、さまざまな神話やデマも多く生まれました。最近でさえ、「ダビンチ・コード」や「天使と悪魔」などいろいろ物議を醸す映画がヒットしたりしています。私たちが十分な知識を持たなければ誤ったキリスト教理解をしてしまう可能性は大いにあります。

新型インフルエンザに対する正しい知識は医者から得るしかありませんが、キリスト教に対する知識は自分自身で確かめることができます。キリスト教の真理は聖書の中にあり、それは誰でも読むことができるのです。2000年もの間、受け継がれてきたキリスト教信仰の価値と意味を、是非とも自分の力で聖書の中から発見していただきたいと願っています。

（理工学部教授）